

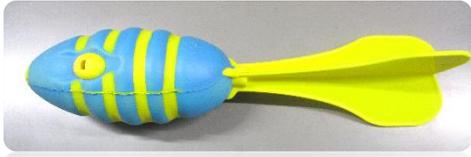
令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 福岡県 】

学校名【 天神山小学校 】

1 実践テーマ	I ・ II ・ III ・ IV ・ <b>V</b> (複数選択可)
2 実施対象者 (学年・人数)	第6学年5組・27名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 ( 体育科 ) ② 行事名 ( ) ③ その他 ( ) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	○ボール投げに関する技能を高めることができる。また、運動に対する苦手意識を軽減し、運動することへの楽しさを実感することができる。
5 取組内容	単元名「6年5組ジャベリックボール大会を楽しもう」 学習の単元計画を全5時間で構成。新体カテストのソフトボール投げの要素を取り入れたチーム戦によるゲームを中心においた学習内容となっている。 事前学習として、新体カテストのソフトボール投げを実施。単元を導入・展開・終末の3段階にわけ、それぞれ1・3・1時間にふり分けた学習を展開した。また、事後学習として再度、ソフトボール投げを行い、事前学習からの記録の伸びを確認した。 <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 10px;">  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">                     今回学習で使用したボール                      EVERNEW                      「スカットキッズ」                 </div> </div> 導入段階（第1時）では、ほぼ全員がジャベリックボールにはじめて出会うため、「ボールの扱いに慣れること」「ゲームを行うために必要な個人の得点表を作成すること」を中心に活動した。ボールの投げ方の指導後、一人あたり5回～6回の記録を測り、個人の得点表を作成した。

<自分の記録(飛距離)>

1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目
25上	25下	20上	30下	30下	25上	

<自分の得点の基準を作ろう>  
※今後はこの基準をもとに自分の記録を確認します

### 個人の得点表

投げた細かい距離ではなく、5m間隔の得点枠として記録を測る。

5回～6回投げた中で一番多かった記録を基準の枠とし、得点を10点とする。

基準から上の枠にいくにつれて5点ずつ増え、反対に下の枠にいくにつれて5点ずつ減っていく。

展開段階(第2～4時)では、まず、個人の得点表をもとにチームの平均点で競い合うゲームを行った。その後、チームのみんなが活躍し楽しむためのゲームの仕方の工夫点を話し合った。

### ゲームの基本ルール

それぞれが2回投げて、得点が高い方を個人の得点としたチームの平均点で競い合う。個人の得点は、得点表に基づいた距離による得点とまっすぐに飛ばすことで獲得できるボーナス点(+5点)がある。

話し合いの結果、「助走の距離を2倍に伸ばす」「ボーナスゾーン的位置を個人によってずらす」「ボーナスゾーンを半分に狭める(その分、得点は2倍の+10点)」の3つのルールの工夫が出てきた。

次に、工夫された3つのルールのうち、どのルールを取り入れると自分たちのチームが楽しめるのか(活躍できそうか)を検証する活動を行った。子どもたちは、実際に工夫されたルールを1つ1つ確かめながら話し合い活動を行い、チームの特徴に一番合うルールを決めた。



工夫されたルールに基づいて検証している様子。



検証結果をもとに自分たちの考えを出し合い、チームのルールを話し合う様子。

チームの特徴にあったルールを確定させた後、個人の投げる技能を高めるために、ICTを用いて投げ方を確認しながら互いにアドバイスをし合う活動を行った。



チームで投げるフォームを確認しアドバイスをする児童の様子。

	<p>終末段階（第5時）では、これまでの学習のまとめとして、チーム対抗のジャベリックボール大会を行い、自身や友達の技能の高まりを実感し合いながら学習を終えた。</p>
6 主な成果	<p>○ 投げることに特化した授業を仕組んだことにより、児童の投げる技能が向上し、結果、学習前に比べてソフトボール投げの記録が向上した児童が27名中23名いた。そのうち、9名の児童が5m以上、記録が向上していた。</p> <p>その根拠としては、「体重移動の仕方」「手首のスナップの利かせ方」「ボールを話すタイミング（投射角度）」を身に付けたことにあると考える。</p> <p>○ ゲームのルールにおける得点の取り方に投げる技能が高い児童とそうでない児童に平等性を持たせたことにより、ゲームで活躍する児童が増えた。</p>
7実践において工夫した点（事業の特色）	<p>○ 単元の導入でオリンピック陸上競技の投てきの映像を視聴させることで、オリンピック、そして投の運動に興味・関心をもたせた。</p>
8主な課題等	<p>○ 投げることへの苦手意識を持っている児童に対しては、児童同士の教え合いだけでなく、専門的な指導を教師自身も深く関わりながら指導していく必要がある。（教えるべきところは、教師自ら教える。）</p> <p>○ 児童一人一人が技能の向上を実感することができるような教具をICT以外にも活用する必要がある。</p>
9来年度以降の実施予定	<p>○ 投げる技能に特化した学習を各学年で実施し、段階的に技能を身につけさせ、結果、学校全体の新体力テストの記録の向上を図りたい。</p>